団員が感じたこと

おもてなしの国，マレーシア

鹿児島市立甲東中学校３年
大迫　佳乃

お風呂は水のみ，トイレも旧式，食事は手で…。事前研修でこの言葉を何度も耳にし，不安と緊張の中，派遣当日を迎えました。そしてすごした８日間。マレーシア派遣事業を終えて帰国した今，私は本当の豊かさについて考え続けています。

ホームステイ初日，布団の中で「やっぱり帰りたい」そう思いました。少し覚悟はしていたものの，言葉は見事に通じないし，料理は見たことのないものばかり，シャワーヘッドから出てくるのは冷たい水，水，水，笑いたくてもうまく笑顔が作れず，夜もうまく眠れませんでした。でも翌朝からホストファザーとマザーが，私の不安を打ち消そうと，あれこれ気づかってくださるのが伝わってきました。特に，ホストマザーはとてもパワフルな方で，私が理解しやすいように体いっぱいのジェスチャーを交えながら英語で話しかけてくれました。そのおかげで，不安がいつしか楽しみに変わっていきました。

最終日の夜，ホストマザーから手渡されたのは，お菓子でデコレーションされた手作りの花束と民族衣装でした。どちらも私の好きな紫色…。あ，昼間ホストマザーが”What’s your favorite color?”と聞いてくれたのは，このことだったんだ！カードには「マレーシアのお父さんお母さんより」と日本語で書いてありました。それを見たとき，言葉にならない思いが，私の胸に広がりました。

ホームステイのあいだ，私は自分自身の考えが変化していくのに気づきました。マレーシアのどこへ行っても，現地の方たちは歓迎の気持ちを愛情いっぱいに，まっすぐに伝えてくれました。また学校訪問では，私たちの到着が大幅に遅れたにもかかわらず，みなさん笑顔で出迎えてくださり，交流活動を通じてあっという間に打ち解けることができました。普段，自分の意見を後回しにしがちな私は，人懐こい子どもたちの笑顔にふれて，自分の喜怒哀楽や感情はもっともっと相手に伝えていいのだということを学びました。学校訪問で見せてくれた子どもたちの笑顔と温かい手のぬくもりは今も忘れられません。

今回の派遣で私たちが訪れた村は，設備や交通といった点では鹿児島よりも不便かもしれません。でも，そこで暮らしている方々の笑顔は本当に輝いていて，私が思い描いていた「幸せ」の基準がぐらつき始めています。シャワーをひねれば熱いお湯が出ることやいつでも安心して水が飲めること，確かに村の発展には大切なことかもしれません。ですが，それ以上に心の持ち方が大切なのだということに気づかせてもらいました。この研修で学んだことを家族や周りの友達，先生方などにも伝えていこうと思います。

マレーシアは，急速に発展する国の一つとして世界中から注目されているそうです。今回の研修を機会に，マレーシアについてさらに知識を深め，応援し続けていきたいと思っています。そして，いつかマレーシアのお父さんお母さんに会いに行こうと思います。最後に，この研修に参加させてくださった多くの方々に感謝申し上げます。テリマカシ！

ホストファミリーと初対面の様子（真ん中本人）

３家族で夜ご飯を食べに行った時の様子

団員が感じたこと

笑ってみなきゃわからない！

鹿児島県立鶴丸高等学校１年
城山　千晴

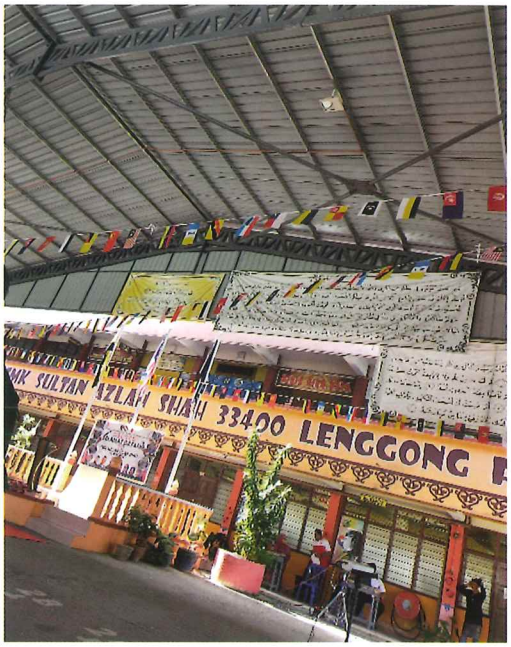
出発前日，胸の鼓動が止まらなかった。どんなときも，"なんとかなるでしょ"の私でも，この時ばかりは顔が固まっていた。大都会クアラルンプールを出て，レンゴンの深い山へ。緑が深くなるにつれて，私の不安が増していく。しかし。入村式で私たちを待ってくれていたのは，マレーシアの方々の笑顔だった。にんまりとした優しい眼差し。心がじんわりとあたたかくなるのを感じる。

私のホストファミリーはキャンプ場を経営していた。私がホストシスターだと思っていた，唯一英語が通じたお姉さんのフスナは，実は大学生でキャンプ場へインターンシップ中の私と同じホームステイ中の身であり，最終日前日その真実を知った時は腰を抜かした。それくらい，まるでスタッフ全体，いやお客もくるめて１つの家族のようだった。みんな本当に優しかった。笑顔を見るだけで，心の豊かさが伝わった。私の不安を吹き飛ばしてくれた彼らのように，私も誰かに笑いかけられたらと思う。

マレーシアにいると，日本国内の課題についても見えてくる。大きいのは，国際文化への理解だと思う。１つの経験として，私がお土産として持って行った日本のお菓子が，ハラルマークが無いためにあまり受け入れてもらえなかったことがある。日本に実習などで来日するマレーシアを始めとした国々のイスラム教徒の数は年々増えている。そうした方々の文化の理解と，ともに暮らしていくための配慮が求められると思う。私も交流を深めて，困っている海外からの移住者の方々を助けていきたい。

また，私が特に印象に残ったのが，現地の中学校への訪問だ。日本だと考えられないほど熱い歓迎を受け，とても嬉しかった。言葉が通じなくても，教えてくれた伝統遊びはとても盛り上がった。石を投げて手の甲に乗せる遊びなのだが，かなり難しく，苦戦しつつ成功したときは手を叩きあって喜んだ。現地の友達もたくさん増えた。またみんなの目はキラキラしていて，校歌の合唱の時はそのものすごい迫力に驚いた。建設中の高層ビルが立ち並び，これからどんどん発展していくマレーシアを支えていく彼らのパワフルさを肌で感じた。

マレーシアの日々は一瞬にして過ぎ去り，ホストファミリーとの別れは辛すぎて涙が止まらなかった。今回学んだことは，多すぎてここでは伝えきれないが，１番大きいのは，"笑ってみなきゃわからない"ということだ。日本にいても，ニュースや本で海外を知ることは出来るが，そこからの少ない情報を頼りにイメージだけが先行して膨らんでしまうことが多いと思う。でも実際人と（言葉は通じなくても）笑い合うことで，自分が持っていた先入観の間違いを知ることが出来る。デジタル化が進んだ今だからこそ，もっと世界に飛び出して，そういった偏見を無くしていきたいと思う。そしてホストファミリーと，ここまで支えてきてくれた家族，学校，協賛企業様，鹿児島市，事務局の方々に感謝を伝えたい。terima kasih!!!



中学校の広場の写真。建物がとってもカラフルで可愛い。

ホストファミリー，ホストファザーの友達と，
レストランでマレーシア料理，とても美味しかった！
（本人あり：左前）

団員が感じたこと

学びと　出会いと　感動と

樟南高等学校３年
坂之上　琉生

福岡空港から約８時間のフライトを経て着いたクアラルンプール。ホテルまでのバスの車窓から見たあの夜景は一生忘れない。街を埋め尽くす高層ビル，見たことない輝きを放つツインタワー。東京よりも発展しているなと感じた。ホテルについて明日からの日程に期待で胸を膨らませながら眠りについた。

次の日，JICA の事務所にて，JICA の活動内容やホームステイ先での注意点について教えて頂いた。期待で胸を膨らませていた私だったが，注意点を聞くにつれて不安が増していった。

JICA を後にし，中華を食べ，ホストファミリーの待つ，ペラ州レンゴン地区へ向かった。到着してバスを降りると，私たちのホストファミリーたちが盛大に迎え入れてくれ，入村式と歓迎会を催して頂いた。そこで初めて自分のホストファミリーと顔合わせをした。

入村式を終え，自分のホストファミリーの家に向かった。私のホストファミリーは５人家族でホストペアレント以外は英語も通じる家庭だった。荷物を置いて自己紹介とお土産を渡した。お土産をすごく喜んでもらえてすごくうれしかった。

私の家のお風呂は水シャワーだった。初日は冷たすぎてまともに体も洗えなかった。トイレも少し床が濡れていて，入るのに少し抵抗を感じた。生活になれなかったホームステイ初日だった。

３日目からは，現地の小学校，中学校を訪れ，交流を深めた。私たちは書道，折り紙，歌の発表をした。特にドラえもんの歌を現地の人も一緒に歌ったのが印象的だった。また，協力隊の田ノ畑隊員や谷口隊員から，マレーシアの課題やお二人の活動内容を実際に見たり，聞いたりすることで自分も国際的に活躍できる人材になりたいと改めて強く感じた。ホストファミリーとの生活にも慣れ始め，夜市場や屋台に行ったり，他の団員とその家族を集めてダーツパーティーをした。

ホームステイ最終日には，動物園に行ったり，川で水浴びをしたりした。お別れパーティーもとても盛り上がり充実した４日間だった。初日からすると４日で見違えるほど環境に適応できるようになった。

村を離れるとき，ホストマザーの涙にもらい泣きしそうになった。ホストファミリー，レンゴンの皆さん本当にありがとう。そして，Jumpa lagi!!!(また会いましょう!!!)

６，７日目のクアラルンプール視察では，クアラルンプールの発展の勢いと活気に驚くとともに，街並みに民族や宗教の違いを感じた。また川の汚染，ゴミが道端に落ちていたりと，衛生環境が発展に追いついていないと感じた。

帰りの飛行機の窓から次第に離れていくクアラルンプールを見て寂しい気持ちにもなったが，楽しかった思い出の余韻に浸りながら８時間のフライトを終えて，無事に帰国した。

この事業で私は，異文化理解や国際協力について学ぶとともに，マレーシアの人々の温かさを感じた。この事業で体験してきたことのすべてが私の貴重な財産になった。

この事業にかかわってくれた方々全員に感謝し，学んだことをまずは近くの人から広め，自分の今後の将来に繋げていきたい。

Terima kasih!!!!! (ありがとう!!!!!)

ダーツパーティーの様子

ペラ州の動物園　（本人前列左から２番目）

団員が感じたこと

マレーシアで学んだこと

鹿児島県立鹿屋高等学校１年
久保田　紗那

今回のマレーシアでの体験で自分自身を見つめなおすことができたり，世界について深く考えたりすることができました。特に印象に残ったことは，マレーシア人のおもてなしです。日本では決して体験することができない感動がありました。まず入村式では村の人全員でお出迎えをしてくださり，涙が出るほどの嬉しさでした。今まで緊張や不安を持っていた自分でしたが，ホームステイが一気に楽しみになりました。また，青年海外協力隊員の田ノ畑隊員が働いている小学校では生徒が私たちのためにご飯を用意してくださったり，踊りを見せてくれたり，先生方と一緒に写真を撮ったり，別れるときには涙が止まりませんでした。ほんとに歓迎してくれて嬉しかったです。また，今回マレーシアのレンゴン地区だったからこその絆を感じることができました。夜になると，近所の家族と夜ごはんを食べたり，パーティーをしたり，王様の宮殿を見に行ったり，お買い物に行ったり，村の人たちが仲が良かったからできたことがたくさんありました。またホストファミリーは私のことを本当の娘として家族として約３日間過ごしてくれました。少ない期間でしたが心から愛してくれました。本当に心から感謝しています。マレーシア人は村の人全員でおもてなしをしてくれたけど，きっと日本だったら近くの家の方々と一緒に出迎えではなく，それぞれの家庭でおもてなしをすると思います。おもてなしの仕方でも国の文化が違うのだなと思いました。

マレーシアは発展途上国と聞いていたので，勝手に貧しくて生活が大変だと思っていたのですが，全くそれを感じることがありませんでした。むしろ，都市は東京ぐらい発展していたのではないのかなと思うくらいビルも高くて夜になると屋台がにぎわっていてとても明るかったです。でも，都市部と地方部ではやはり格差があるなと思いました。それは日本も同じ問題を抱えていると感じました。これからも世界と協力して発展していってほしいです。また，マレーシアは多文化社会でイスラム教など宗教については日本で考える機会が少ないのでいい機会になりました。

今回のマレーシア研修では，日本文化とは全く異なる部分も多かったです。言葉も通じるかほんとにギリギリまで不安でした。でも，ホストファミリーが私が話している時に真剣にきいて理解しようとしてくれるのがほんとに嬉しかったです。

「言葉の壁」は全然分厚くないなと思いました。でも，今回の研修で自分の英語力が試せてまだまだだなと思いました。もっと勉強しないとなと思った半面，自分に少し自信がつきました！

ほんとに貴重な経験をさせていただきました。私は将来国際関係の仕事につきたいと考えています。将来について深く考えさせられる体験が多かったです。この経験を無駄にせず，これからの自分に生かしていきたいです。

今回はほんとうにありがとうございました。

三家族とお買い物

（本人あり：左前）マレーシアの中高生と撮った写真

団員が感じたこと

大好きなマレーシア

鹿児島県立鹿屋高等学校2年
朝田　真央

マレーシアの首都，クアラルンプールに着いて私はまず驚きました。クアラルンプールは東京よりも都会ではないかと思ってしまうくらい高い建物がたくさんあり，発展していました。しかし国全体をみてみるとどうでしょうか。公共の排水口に普通にゴミが落ちているような衛生環境が悪い貧困地域もあるそうです。私は様々な隊員のお話を聞いて都市と農村部で大きな格差があるという事をとても感じました。そして，実際に海外に行き頑張っている方達の「自分が今いる場所や立場で自分にできる精一杯のことをする」「たくさん人を頼ってたくさん助けてもらいなさい」という言葉がとても心に響きました。一生懸命な隊員の姿は，私の目にとてもキラキラ輝いて映りました。

私がこのスタディツアーで１番楽しくて心に残っていることはホームステイです。私たちのホストファミリーはみんなイスラム教徒でした。私はマレーシアに来るまでイスラム教のことをよく知らずに，「怖そう，厳しそう」と勝手に偏見を持っていました。しかしその考えは大間違いでした。実際にホストファミリーに会ってみると心優しく，とても暖かい家族で居心地が良かったです。

私は，マレー語が完璧ではない状態でマレーシアに行きました。最初にホストファミリーに会った時は何を言っているのかが本当にわからなくてどうしよう，と思っていました。どうにか交流をしようと，日本から準備してきた折紙を作り，アルバムを見せて，日本語で家族の名前を書いたりしました。すると急に距離が縮まってもっと仲良くなれました。家族みんなでニコニコしながら過ごしたあの時間は最高に幸せでした。会話をしたいときは指差し会話帳で話したりジェスチャーを繰り返したりしてなんとか伝えました。お互いに理解したいという気持ちが強かったので，一緒に過ごす時間が長くなるにつれて話したいことが雰囲気でわかるようになってきました。私がアルバムを見せると，ホストマザーもアルバムを見せてくれました。たくさんあったホストファミリーのアルバムは，どれも家族愛で溢れていました。本当に最高な家族です。

この事業に参加して，自分がよく知らないにも関わらず思い込みで勝手に偏見を持つべきではないということがよくわかりました。そして日本に今まで住み続けていた私は，視野が狭く世界には様々な知らない事がたくさんあるということも感じました。今回の体験をして私は世界で活躍できる人になりたいと思えるようになりました。これからもたくさんの国に行き，自分の目で見て学び，柔軟な考えを持てるようになりたいです。そして私はまた必ず大好きなマレーシアのホストファミリーのところに帰りたいのでその時までにもっとマレー語を勉強しておきます！

本当にたくさんの方々のおかげで私は一生心に残る最高の経験ができました。感謝でいっぱいです。テリマカシーバニャバニャッ（たくさんたくさんありがとう）。この事業に参加できてとても良かったです。

（本人あり：左）ホストブラザーの家族と一緒に

（本人あり：左）現地の中学生とかぶと作り

団員が感じたこと

挑戦・新鮮・マレーシア

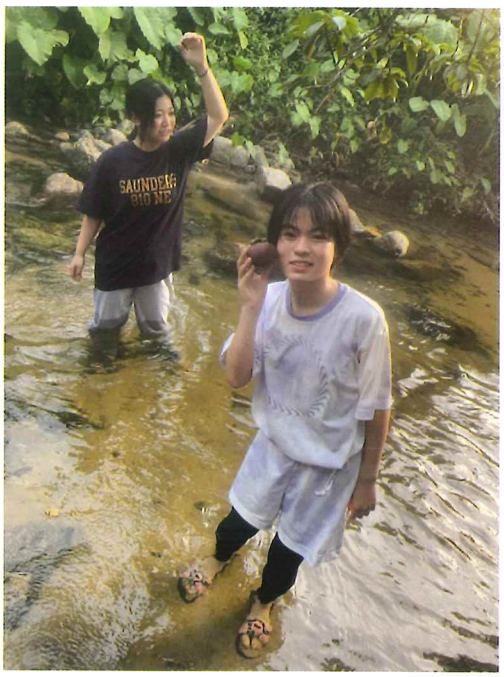
枕崎市立立神中学校3年
桑原　さくら

私は，この事業に参加して日本では体験できない経験をたくさんすることができました。数えきれないほどたくさんの経験をしましたが，その中でも新鮮だった経験がいくつかあります。

一つ目は，自然がとても身近に感じられたことです。３分ほど歩けば川があり，庭先にはバナナの木があり，家の前にあるヤシの木の森には朝や夕方になると猿が現れたりしました。また，家には鶏がいたり，果物の木がたくさん生えていたりしました。現地の子供達は，学校から帰ってくると川で遊んだり，果物をとって食べたりしていました。私も川で水浴びをしましたが，川の水は透き通っていてとても冷たかったです。マレーシアではこの水浴びやシャワーを浴びることを「マンディー」といい，現地では，１日に何度もこの「マンディー」をします。暑いマレーシアで過ごす人々の生活の知恵だと感じました。すぐそこにきれいな川があり，思った時に水浴びができる環境はとてもうらやましく，自然と共に生きている姿に感動しました。また，マレーシアの方々が１日何回も行うことの一つに「食べる」があります。マレーシアでは１日に５食ほど食べるのが当たり前だそうです。朝・昼・夜はもちろんですが，朝食と昼食の間に一回軽食があり，昼食と夕食の間にも軽食があります。その影響もあるのかマレーシアの学校にはチャイティーンという飲み物や軽食を販売している場所があるそうです。また，道路の脇にはちょっとした屋台やジュースや果物が売っている店がたくさんありました。研修中もホストファミリー宅に帰ってくると夕食の前に少しフルーツや日本でいう餅のようなものを出してくれたりしました。

二つ目は，マレーシアの方々のフレンドリーさについてです。ホームステイ中はホストファミリーとだけではなく，近所の子供達やホストファミリーの友達との交流もありました。どの方も「名前は何？」「好きなものは何？」と興味津々にきてくれました。また，近所の子供達は，私が研修からホストファミリー宅に帰ってくるとすぐ遊びにきてくれて，ほとんど毎日一緒にお菓子を食べたり，遊んだりして貴重な時間を過ごすことができました。また，私は入村式の時や研修で訪れた小学校の歓迎ムードに感動しました。日本では感じられない，フーフーワーワーという感じの盛り上がり方でその場所にいるだけで幸せな気分になりました。日本では昔より人間関係が希薄になっていると言われますが，マレーシアは人と人のつながりが強くそれぞれが尊重し合っている姿に，羨ましく感じました。

私は，今回の活動で日本にいては感じることのできないものにたくさん出会うことができました。この事業に参加してお世話になったすべての方々への感謝を忘れず，感じたことや思ったことをたくさんの方に伝えていきたいです。この事業に参加できたことは私の財産になりました。また，絶対にマレーシアに行きたいです。トゥリマカシー‼



（本人あり：前）
ホームステイ先の近くの川でマンディー，
日本でいう水浴び

（本人あり：真ん中）
ホストファミリーとマレーシアの伝統衣装を着て

団員が感じたこと

マレーシアが私にくれたもの

鳳凰高等学校１年
園田　春陽

今回の事業に参加して，本当に多くの方々の温かさに触れ，多くの「初めて」を体験し，人生で一番と言っていいほど充実した忘れられない一週間を過ごした。この事業に応募した理由は大きく分けて２つある。まず，日本にいてもテレビや本などで発展途上国について知ることはできるが，自分の目で見ることが大切だと思い，現地の方と直接触れ合うことができるこの事業に参加しようと考えたからだ。　また，引っ込み思案な自分を変え，海外の方とコミュニケーションが取れるような力をつけることの出来る貴重な機会だと思い，将来の夢を見つけるきっかけにしたいと考えたからだ。

今回，初めての海外で，初めての事業ということで正直，不安や緊張もあった。ホームステイ先に着くまで，私の拙いマレー語や英語だけでうまくコミュニケーションが取れるだろうか，ホストファミリーはどんな方々なのだろう，など，不安でずっと考えごとをしていた。しかし，実際に会ってみたら，とても明るく優しい方々で，私たちを熱烈に歓迎してくださった。ホストファミリーも私が不安にならないようにずっと話しかけてくださって，私も本当の家族のように安心して楽しく過ごすことが出来た。特にホストシスターのアインさんは,「私のことはカカ（マレー語で姉妹）と呼んで，姉だと思って！」と言ってくれて，寝る時までずっと，「寂しくない？不安なことがあったらなんでも言ってね」と話しかけてくれたり，マレー語やイスラム教についても教えてくれた。ホストファミリーの皆さん一人一人が私を気にかけてくださって，拙い英語でもコミュニケーションが取れた。美味しいご飯を作ってくれたり，いろんなところに連れて行ってくれたり，日本の文化も喜んで体験してくれたり，とても短い期間だったが濃い思い出がたくさんできた。笑顔でお別れをしようと決めていたが，ホストファミリーに抱きしめられた瞬間から涙が溢れて止まらなかった。とても濃い４日間だった。ホームステイ先ではもちろん，現地の学校やお店などでも熱烈な歓迎を受け，どこへ行ってもマレーシアの方々は笑顔で挨拶をしてくれて，改めてマレーシアの方々の温かさを実感した。

今回の事業ではマレーシアの発展途上国としての課題も知ることも出来た。首都クアラルンプールには高層ビルが立ち並び，発展途上国という感じは全く無かった。しかし，現地でJICA派遣員として活動する谷口亮隊員の話では，まだトイレの整備や，ゴミ問題など衛生環境が悪かったり，麻薬の使用や暴力が日常的に起こってしまっている貧困地域もあると知り，大きな格差を感じた。中でも，幼少期から民族間の強い差別意識があることを知り，深くショックを受けたと同時に差別をなくすために何ができるだろうと考える貴重な機会となった。

この充実した７泊８日を通して，新しいことを恐れずに挑戦する力をつけ，参加前より一回りも二回りも成長出来た。私を支えてくださった全ての方々に感謝したい。テレマカシ　バニャック！

（本人あり：左）
ホストシスターの娘のハナ（右）と
ホストブラザーの息子のアニ（中央）

（本人あり：左）
ホストシスターがラクサをご馳走してくれた

団員が感じたこと

またいつか会える日を願って

霧島市立陵南中学校１年
村上　由佳

今回私は初の海外であり，初めて家族がいない７泊８日をマレーシアで過ごした。

日本に帰国後は，マレーシアに帰りたくて仕方なかった。それぐらい，私はマレーシアが大好きになった。

日本を出国する前は，発展途上国に対する偏見や家族と離れる不安があったが，そんな思いはマレーシアの色んな雰囲気に塗り替えられた。実際のマレーシアは，思っている以上に発展していた。その一方で，過疎地との地域格差も感じた。

マレーシアは，とても食に恵まれている国で，普通の量の食事を１日に５回もする。

１日３食の私達には考えもしないことだ。

マレーシアでは，「マンディー」という入浴があります。一度目は，他のホストファミリーの家でお別れ会をした時に洋服を借りて川に入り，「リバーマンディー」をしました。二度目は，私のホストファミリーの家の前にある川で着の身着のまま入るように言われ，戸惑いましたが日本ではできない経験なのでチャレンジしました。４日目に行った青年海外協力隊活動視察では，実際に活動している谷口亮隊員の「困った事があったら，頼っていいんだよ。たくさんの人に頼って，たくさん助けてもらいなさい」という言葉を聞いて，心を動かされた。勇気を持って実際に活動できることは，すごいことだと改めて思った。

実際にマレーシアへ行くことで，私が思っていた発展途上国への偏見が覆され，親へのありがたみと共に，自主自立を学ぶことができた。また，まだ差別が残っていることも知った。日本がいかに恵まれているかと，実感した。

今のマレーシアの現状を知っている人は少ないと思う。だからこそ，マレーシアの事をみんなにもっと知ってもらいたいと思った。　私が実際に行って，見て感じたことを家族や周りの人にたくさん教えたいと思います。そしてたくさん知ってもらい，大好きになってほしいです。また，青年海外協力隊という素晴らしい活動にも興味をもってほしいと思った。

私はこの事業に参加してよかった。参加したことで，色んなことへの好奇心が増えて，新たに夢も増えた。

将来は，青年海外協力隊員として活動に参加し，様々な国の文化や習慣などを学び，途上国の問題解決に少しでも貢献したいと思った。

村とのお別れ，ホストファミリーとのお別れでもある。私は朝から急いで，マレー語で手紙を書いた。渡したときに凄く喜んでくれた。バスに乗る前の限られた時間で，感謝の気持ちを伝えるのは難しかった。最後にシスターが，「貴方は，私の大事な妹」と言ってくれた。私はその一言で，ホストファミリーとの，たくさんの思い出ができた。最初の日に不安で泣いてしまった事や，一緒に動物園に行ったり，お互いに自分たちの言語を教え合ったりしたあの日々が，もう終わりなんだと思うとたくさんの大粒の涙がこぼれ落ちた。シスターやマザーに抱きしめられ，もう帰りたくないと思った。

バスが出発するとき，またマレーシアに帰ろうと心に決めた。

お別れの日の朝ごはん

（本人：前真ん中）
村との別れ前日の夜　ホストファミリーと

団員が感じたこと

マレーシアでの学び

鹿児島県立吹上高等学校2年
前野　優夏

主にマレー人，華人，インド人が各々の文化を持ち共存しているマレーシア。以前から興味を抱いていた国で，今回有難いことにマレーシアを訪れる機会を得ることができた。自宅を出て15時間，クアラルンプール国際空港に降り立つと，発展途上国ということを忘れてしまうほどそこには煌びやかな光景が広がっていた。身体は疲れていたが，明日からのホームステイや，学校訪問，現地の方との交流，マレーシアでしか得られない経験に思いを馳せ，とてもワクワクしていたのを覚えている。

発展途上国と聞いて，貧しく，ライフラインの整備が整っていないイメージであった。ペラ州レンゴン地区を訪れると，日本と大差ないほど整備され，ホームステイ先ではシャワーや扇風機，クーラーもあり快適に過ごすことができた。しかし，JICA の谷口隊員の住む地域ではライフラインの整備不足と同時に，そこではルールがほとんど存在しないために，団地の中から道へゴミを投げたり，サッカーのルールを知らず，ボールを奪われ友達を殴ったり，子供たちは排泄物の上で遊ぶのが日常だと聞き写真も拝見したが，想像していた以上に衝撃的なものであった。谷口隊員はその地域で，障がい者や子供たちへの支援を行っており，勉強を教えたり，友達を作るきっかけ作りや，様々なことを経験をしてもらう場を設ける活動を行っているとのことであった。日本では幼少期より生活の中でルールを身につけるため，改めてルールについて考える機会が少ないが，そこでは遊びを通してルールについての重要性を伝えているそうだ。また LGBTQ の方への人権がないとの話も印象的であった。日本でもまだ認知が浅く，LGBTQ に偏見のある方も多くいるのが現状だが，マレーシアではイスラム教の戒律もあり，宗教による人権侵害もあるのではないかと感じた。彼らにとっての日常は私にとっての非日常で，発展途上国における衛生観念や地域格差，ルールの重要性，LGBTQ の在り方について改めて考える機会となると同時に，私も何かしらの国際協力に貢献したいと思うきっかけとなった。

また，今回初めてホームステイも経験。ホストファミリーは60代の夫婦２人であったが，毎日誰かが訪ねてきたり，誰かを訪ねたりと賑やかで，レンゴン地区では人と人との繋がりが濃く感じられた。言語的コミュニケーションは難しかったが，色々なマレー語を教えてもらったり，ジェスチャーや表情で意思疎通でき，言葉の壁を感じることも少なかった。ホストファミリーは本当に温かく，食の細い私に毎日たくさんの食事を用意してくれたり，日本ではあまり見かけることのない色々なフルーツを食べさせてくれたり，地域の方と触れ合う機会を設けてくれたり，伝統衣装のバジュクロンを着せてくれるなど，帰国日を先延ばししたいほどあまりにも濃く短く，思い出深い４日間のホームステイであった。ここでの経験は，人生の糧となり一生の宝物である。またの再会を楽しみに，terima kasih（ありがとう）。

（本人あり：真ん中）ホストファミリーと一緒に

ドリアンの種取りをしている様子

団員が感じたこと

マレーシアのおかげで

鹿児島県立加世田高等学校１年
大渡　彩也華

私が特に印象に残っていることは，マレーシア人の温かさです。住んでいる国や話す言語も違う私をすぐに受け入れてくれて，コミュニケーションも，伝わりにくいのに一生懸命にとろうとしてくれて，そういうところが日本人には無い人の温かさなのかなと思いました。日本人は人見知りをしてしまい，落ち着いた感じで話し始めて，仲が良くなってきたら笑顔が増えていく感じだけど，マレーシア人は初対面でもとってもテンションが高くて，すぐに馴染むことが出来ました。そのおかげで私は不安しかなかったホームステイをしっかりと充実させることが出来ました。

私はマレーシアに行く前と今で考え方が少し変わりました。私のホームステイ先ではお風呂でお湯が出ませんでした。なので，泣きそうになりながら毎日お風呂に入っていました。でも，ホテルのお風呂や日本のお風呂ではお湯が出ました。その時，私はお湯のありがたさにとっても感動しました。日本ではお風呂のお湯が出るのが当たり前という考え方ですが，でも，世界中のみんなが必ず綺麗なお湯でお風呂に入れていないということに身をもって気づくことが出来ました。この気づきによって水やお湯を大切に使おうという考えをしっかりと胸に刻むことが出来ました。

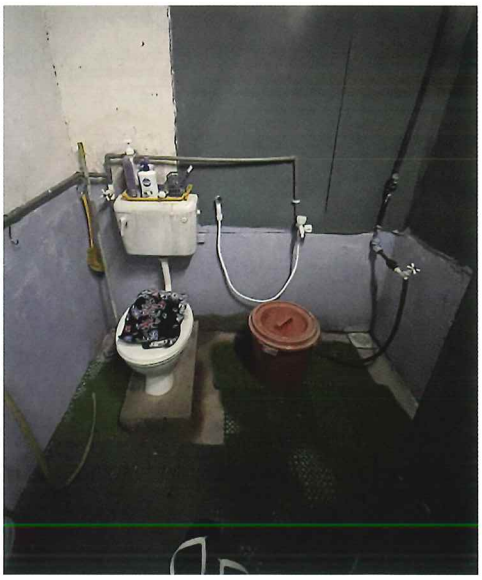
私はマレーシアでは１日５，６食食べることにすごく驚きました。日本では１日３食しか食べていなかったので，最初はとてもきつかったです。おやつみたいな感じで少しずつ食べると思っていましたが，５，６食全部がしっかりとご飯でした。私のホストファミリーはみんな優しかったのでたくさん食べてと言ってくれたけど正直とってもお腹いっぱいで，お腹がすいたという時間が無かったです。でも，どのご飯もとっても美味しくて，あきることなく食べることが出来ました。私はナシゴレンというご飯が１番美味しかったなと思いました。またマレーシアに行った時にも食べたいし，日本でも自分で作って食べてみたいです。

また，私はマレーシア人が英語を話せていることにもすごく驚きました。マレーシアでは小学生の時から英語で授業を受けるので英語も話せるのです。マレー語と英語どちらも話せることはとてもすごいことだと思います。日本人はごく一部の人しか英語を話せないと思います。英語は世界共通語だと思うので，私たち日本人も英語を話せるようになった方が良いと思います。なので，私もこれから英語をしっかりと勉強していきたいと思います。

私はこれから，この体験授業で学んだこと感じたことを周りの人に伝えていきたいと思っています。また，英語の勉強をしっかりとして英語を話せるようになりたいです。よりたくさんの人とコミュニケーションをとるためにも英語をしっかりと勉強していきたいです。青年海外協力隊として活動したいと思っているので，いろいろな勉強も頑張りたいです。

またマレーシアに行きたいです。なのでそのためにも，お金をたくさん貯めたり，マレー語の勉強をしたりといろいろと準備をしていきたいです。

（本人あり：真ん中）ホストファミリーとのお別れ



ホームステイ先のトイレとシャワーの様子

団員が感じたこと

幸せの在り方

鹿児島県立鹿児島中央高等学校2年
森田　遥香

日本を離れること。これは私にとって初めての体験で，とても有意義な経験となった。

福岡空港からバンコクを経由しマレーシアの首都であるクアラルンプールに着いた。街は電気がついていて明るく，バスの窓からは見えない高さのビルやタワーに驚いた。私の気持ちは最高潮に達していた。しかし，ホームステイ先の村へ向かうにつれて，楽しみよりも不安が大きくなっていた。

村に着くと，多くのホストファミリーが私たちを歓迎してくれた。歓迎の仕方はマレーシア特有のご飯のおもてなしだった。村に着いて早々右手を使ってご飯を食べた。そして，ホストファミリーの家に着いたら家族みんなが笑顔で出迎えてくれてとても嬉しかった。お湯は使えたが，たまに水が薄茶色く濁っていたり水圧が弱くなったりして綺麗な水に限りがあることを感じた。しかし，ホストファミリーと過ごしていくうちに不安はなくなっていった。私がホストファミリーと過ごして嬉しかったことは，色んな体験や場所に連れて行ってくれたことはもちろん，本当の家族，妹として扱ってくれたことだ。お姉さんたちは服や帽子，靴を貸してくれたり，さらにはコーディネートやお化粧までしてくれた。鏡の前に２人並んで化粧を落とした時は本当の姉妹みたいで嬉しくなった。言葉が通じないこともあったけど，英語やジェスチャーを使いながらお互いの気持ちを伝えることができた。お別れの日には，日本に帰りたくないと思うほどホストファミリーと村が大好きになり，私の第２の故郷になっていた。

現地の小・中学生と交流したときには，みんな元気で積極的で驚いた。折り紙を見せるとみんな興味津々に目を輝かせていた。一緒に折りながら兜や鶴を作った。何とか完成すると嬉しそうに眺めたり，兜を被ったりしているのを見て折り紙を折って良かったと心から思った。活動の合間にはマレー語を教えてもらったり，日本語を教えたりして異文化の相互理解を深めることができた。

この１週間を通して，私は「幸せ」の意味について改めて考えさせられた。日本を出る前は日本が１番快適で過ごしやすいと思っていたが，マレーシアでもクーラーやテレビがない中で充実した生活を送ることができた。むしろ，日本で過ごすときよりも楽しく，幸せだった。現地の人たちもみんなで助け合いながら，毎日笑顔で幸せに暮らしていた。発展途上国だから「大変」，「生活するのに精一杯」と思っている人が少なからずいると思う。しかし，そう思っている人たちに「幸せ＝便利」という考えは違うと伝えたい。そして，日本に生まれてきたからこそ周りの方々，環境に感謝しながらいつかマレーシアに，ホストファミリーに恩返しができるように一生懸命勉強したい。最後に，マレーシアに行く機会を与えてくださった方々，一緒に活動してくれた仲間に感謝です。テリマカシ（ありがとう）！！

（本人あり：真ん中）初めてのヒジャブ

作った兜を被っている様子

団員が感じたこと

私にできる第一歩

鹿児島県立市来農芸高等学校2年
加世田　美雪

私は今回マレーシア研修に参加して，自分が住んでいる世界は自分が思うより大きいと実感しました。

私は今まで，マレーシアについてほとんど知らなかったので，勝手に他の国とまとめて発展途上国という括りにしていました。ですが，実際には私たちが想像するよりもマレーシアは発展していました。あと数年で先進国と言われるようになるだろうと言われました。私が海外に行くのは今回が初めてですし，知っている国も20か国程度です。世界中には約200の国があります。その国それぞれに文化があり，伝統があり，発展状況や抱えている問題は様々です。私は現在先進国と言われる日本に住み，他の国の支援をできる立場にあります。今回は青年海外協力隊という活動を主に視察しましたが，他にも似たような活動は多くあります。ですが，どのような活動をするとしても，その国の状況を知らないままでは何もできません。なので，まずは存在する国それぞれの名前や場所，環境などについて調べて，それぞれの国を個々に認識できるようになりたいです。その上で実際に現地に行ってその状況を体感し，自分なりにできることを考えてみたいです。

また，この研修は私の将来を見つけるきっかけにもなりました。

私の将来の職業は農家の予定です。両親の経営している観光農園を継ぎたいと思っています。実家の近所で，外国人労働者が増えてきました。日本は少子高齢社会と言われています。そういった社会になっていく中で，外国人との交流は大切です。互いの言語を覚えることは大切です。ですが，母国語とふれあうことも大切だと思います。私は今回，ホームステイをして，ホストファミリーとマレー語でコミュニケーションを取りました。食事やシャワーなどのちょっとした会話はできたのですが，少し複雑な会話は難しく，必死に伝えようとしましたし，相手も理解しようとしてくれますが，本当に伝わっているのか，相手が言いたいことを私が正確に理解できているか，とても不安になりました。そんなとき，日本語の通じる団員と会えると安心しました。それはどんな人でも同じだと思います。互いに言語を覚えることも大切だと思いますが，日本に来たばかりで，初めて自分の言語が通じない環境は気が滅入るでしょう。そんなときに自分の母国語が通じる人が身近にいる，同じ国出身の人とふれあうきっかけがある。そう分かるだけでも安心できると思います。私は将来観光農園を経営しながら多くの言語を勉強し，鹿児島に来る，志布志に来る外国人の方にとって憩いの場を提供し，また，雇い主などと彼らの架け橋となりたいです。

私は今回の研修で様々な発見をしました。この経験を今後の生活に生かし，また，マレーシアの状況などを他の人に伝えていきたいです。今回の事業では一緒に同行した同伴者や同じ団員の方々との交流もでき，他の高校のことなども知ることができました。マレーシア研修以外でも私にとって有意義な時間となりました。

（本人中央）入村式でホストファミリーと
初めて会った私にすごく優しくしてくれました

クアラルンプールのツインタワー
クアラルンプールは東京と比べて見劣りしないくらい発展していました。

団員が感じたこと

「本当の楽しみ方とは」

瀬戸内町立古仁屋中学校3年
奥田　優希

僕にとって，日本人に生まれて，日本で育っていることが一番幸せなことだと思っていました。でも，そうではないのかもしれない。それぞれの国で，それぞれの楽しみ方があり，幸せの感じ方があるのだと感じた体験でした。

僕達がホームステイをした村は，クアラルンプールからバスに乗って高速道路を２時間ほど走ったところにありました。バスから降りて，公民館のようなところに行き，そこで入村式がありました。そこで，村長さんのような方が挨拶をされました。本当に心から歓迎されていることを感じました。参加者が一人一人点呼され，僕が呼ばれ，前の方にいくと，ホストファザーが出てこられました。「Nice to meet you」といったら，ホストファザーも笑顔で「Nice to meet you too」と言ってくれました。また，二人が並んだら，会場が笑いにつつまれました。なぜみんな笑っているのだろうと思ったら，シャルールさんが私に英語で「tall tall」と言ってくれて，身長差があるから，みんな笑っているのだと気づきました。そんな風に明るく僕達を迎えてくれました。

ホストファザーの家族は６人家族でした。ホストファザーは英語も使えるので，僕はかなり助かりました。家族には，日本からプレゼントをもってきていきました。けん玉をとても気に入ってくれて，ホストファザーがさっそく練習をしていました。

青年海外協力隊の方がおられる小学校に行きました。小学校では大歓迎を受けました。僕達は，国歌とドラえもんの歌を歌いました。ドラえもんはマレーシアでもとても人気のある番組で，「とっても大好きドラえもん」の歌詞のところは，マレーシアの方も大きな声で歌ってくれました。帰りは，小学生がバスまでの道に並んで花道をつくってくれて，もうそこで涙を流している人達もいました。次に中学校を訪問しました。中学校では５人一組に分かれて，マレーシアの中学生と一緒に体験学習を始めました。葉っぱで製作をする班，アラビア語の学習の班。習字の班，等でした。

ホームステイ先では，毎日色々な所につれていってもらいました。動物園，イオン，ナイトマーケット，夜景，川でも泳ぎました。朝は６時に起きて，寝るのはいつも２時ぐらいでした。そのくらい毎日が充実していて，昼間はあまり眠たくありませんでした。内容が濃く早く過ぎた４日間でした。

日本に帰る飛行機の中で，今回の体験を振り返り，本当に充実した毎日だったなと思いました。もっとマレーシアにいたいなと，思いました。ホームステイ先の家族の優しさ，村の人達の温かさを感じる数日間でした。僕達への接し方は，思いやりとリスペクトがありそれが伝わってきました。

この事業に協力してくれた多くの方に心から感謝しています。相手を思いやる優しさ，温かさを発揮できる人になりたいと思えるようになりました。一生忘れることのない体験になりました。ありがとうございました。

（本人あり：右から２番目）ホストファミリーとの写真

（本人あり：左から２番目）ろうを使った作品作り

団員が感じたこと

新しい価値観や視野

樟南高等学校3年
井上　心結

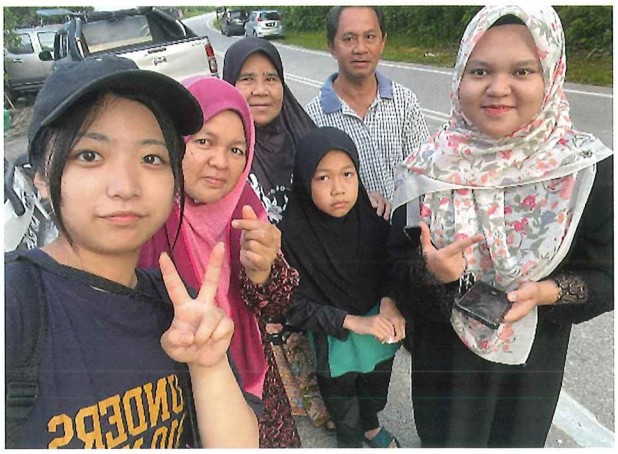
マレーシアという国が私の人生において初めての海外となった。日本から一歩外に出て，初めて海外を知ることで私自身の思考の幅が広がると共に視野も広がる経験を積むことが出来た。今回の派遣事業を通して今後自分がどういうことをしたいのか，どの分野で貢献したいのか，将来像が明確になった。

私はこの経験から学んだこと，感じたことが二つある。

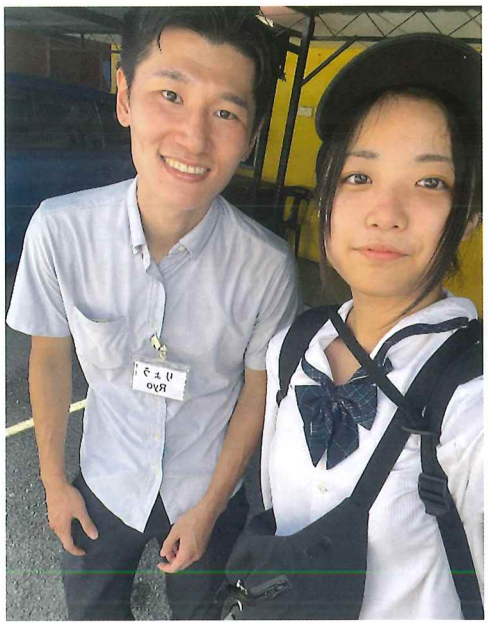
一つ目は，言葉の壁は大きいようで小さいことだ。この事業では，１世帯１人で泊まるホームステイを実施しているそうだ。首都からバスで１時間半かけてホームステイ先まで行く道のりは不安との闘いだった。村に到着しバスから降りると村の方が盛大に歓迎してくれた。ホストファミリーとの対面式でも優しく微笑みかけてくれたおかげで不安が飛んでいき，４泊のホームステイが楽しみへと変わっていく瞬間だった。

マレーシアでは公用語がマレー語であるため会話はマレー語で話さなければならない。事前研修で挨拶や日常で必須となるマレー語は学んだのだが，いざ現地の人と話をすると，言葉が詰まる場面があった。英語とマレー語を使って話をしたり，指さし会話帳を使って話をした。私の拙いマレー語と英語を理解してくれようと最後まで聞いてくれて初日から最終日まで優しさで溢れていた。ホストファミリーと沢山会話をすることができたが私のマレー語力，英語力があれば更にコミュニケーションを図る事ができていたなと後悔した。言語の壁は，お互いが相手と会話をしたいと思えば言葉の違いは関係ないと実感したが，会話を向上させるためには私自身の英会話力を上げる必要があるなと実感した。

二つ目は，現地で活躍している３人の青年海外協力隊の方と会い，話を聞き国際協力に興味を持つことが出来たことだ。国際協力とは国際社会全体の平和と安定，発展のために，発展途上国・地域の人々を支援するとこだ。私は，国際協力をする人を尊敬し，同時に自分と無縁なのだろうと思っていた。障害者が働けるように企業に交渉する方と食事を取りながら話をする機会があった。日本では，障害者に給付する障害者手当や障害者雇用促進法43条に従業員を43.5人以上雇用している事業者は，障害者を１人以上雇用しなければならない法律がある。しかし，マレーシアでは日本のような法律がないため，家族に障害を持った人がいる際は，家族で養っていくそうだ。その話を聞き，日本は，障害を持っている人でも自立して生活できるような仕組みになっているのだと気付いた。国際協力をすることは，お互いの価値観を受け入れ合い，更に技術力を高め，その国が発展するための助け合いなのだと実感した。このように，海外にいくことで知ることの出来た自国の良さや，海外で働いている方の話を聞くことが出来て将来私も青年海外協力隊として世界で活躍したいと思った。１週間という短い間だったのですが，とても濃い１週間を送ることが出来たのも沢山の方々のおかげだということを忘れず，これからの人生への糧にしたいと思った。



（本人あり：左）ホストファミリーとのお別れ



（本人あり：右）青年海外協力隊視察

団員が感じたこと

Seeing is believing

鹿児島育英館高等学校１年
徳永　理咲

“Seeing is believing .”

この事業に参加して改めて実感したことだ。マレーシアの人々，文化，宗教…私が思っていた考えとは大きく異なっていた。

私は初めてのホームステイに期待と不安で胸がいっぱいだった。しかも田舎でのホームステイと聞いて，赤土のでこぼこ道に，穴の空いた和式トイレなど勝手に良くないイメージを持っていた。しかし実際に訪問してみると，道路は整備され，トイレも洋式できれいだった。家も広く，思っていた以上に環境が整っていてとても驚いた。また，ホストファミリーは私を本当の家族のように迎え入れてくれた。困っていたらすぐに助けてくれ，いつも笑顔で優しく接してくれた。彼らの温かいおもてなしに，あっという間に不安が和らいだ。でも，一つだけ壁にぶつかったことがあった。それは，マレー語しか通じないホストマザーとうまくコミュニケーションが取れなかったことだ。言葉が通じないもどかしさもあったが，彼女は身振り手振りでマレー語を教えてくれ，一生懸命伝えようとしてくれた。私も彼女に伝えたい気持ちがどんどん強くなり，積極的にマレー語を調べて使った。すると，だんだん心が通じ合うようになり，別れる時は本当に辛かった。私は，相手に伝えようとする気持ちや理解しようとする姿勢を持つことの大切さを知った。

私にはこの事業で挑戦したいことがもう一つあった。それは奄美の島唄だ。私は小学校の頃，奄美大島に６年間住んでいて島唄を習っていた。「言葉は通じなくても，島唄で楽しい交流ができた。」と，以前この事業で島唄を披露した兄がとても嬉しそうに話していた。その姿を見て，私もいろいろな国の人に島唄の良さを伝えたいと強く思った。ホストファミリーのおかげで，私は４回も島唄を披露することができた。みんなが真剣に聴いてくれ，唄い終わると会場いっぱいに響き渡る大きな拍手をしてくれた。私は，海外で三味線を弾きながら島唄を披露することが初めてだったので，大きな達成感に満ち溢れた。また，島唄を披露する前は現地の人とあまりコミュニケーションを取れていなかったが，島唄を通してたくさんの人と話せて仲良くなれた。音楽には心と心を繋ぐ不思議な力があるのだと思った。私は，これからも海外の人に大好きな島唄の魅力をもっと伝えていきたい。

私はこの事業で，自分の思い込みや先入観にとらわれず，実際に自分の目で判断することの大切さを学んだ。マレーシアの文化を肌で感じ，マレー人と接することでたくさんのことを学び，気づくことができた。また，JICA の活動を視察し，私も将来は国際協力に携わりながら人の役に立つ仕事に就きたいと思った。そのためにも自分の視野をもっと広げ，より多くの世界を知り，私にできることを探していきたい。そして，いつか私の夢である青年海外協力隊の一員としてまたマレーシアに行きたい。

最後に私にこの貴重な経験を得る機会をくださり，支えてくださった全ての皆様に感謝したい。Terima kasih !

（本人あり：右）ホストシスターと

（本人あり）中学生との交流会にて